

卿拜謁せられし時、公上段より下りか、らせ給ふを見て、綱條卿戸○水はしりより、まひてとゞめ進らせられけれど、今日ばかりはと仰ありて、下段にて御對面あり、其後は上段にて、謁をうけ玉ひしとなり、

謹 慎

謹慎ハツ、シムト云フ、常ニ性行ヲ慎ミ、人ニ對シテ粗野ノ行爲ヲ爲サズ、又事ニ臨ミテ持重シ、過失無キヲ期スル等是ナリ、

〔類聚名義抄言五〕謹居隱反、シム

〔伊呂波字類抄疊字〕謹厚

謹慎

〔同六〕慎和、シム

〔續日本紀孝謙三十〕神護景雲三年十月乙未朔、詔曰、○中諸東國乃人等利○末奉侍禮○

〔歷朝詔詞解五〕謹末利○恐カシみをかしこまりともいふごとく、これも麻利ともいひしなるべし、

〔源氏物語五十三〕さやうのこともつゝ、みなきこ、ちして、むら雨のふり出るにとゞめられて、

〔倭訓栞前編十六〕つ、しむ、謹、慎等をよめり、包縮の義也、童蒙頌韻に龔を訓ず、朝野僉載に、禍不入慎之門と見えたり、慎むをつゝ、むといへる事、ふるくより見えたり、されば令包の義にや、

〔神道玄妙論〕敬は都々斯美と訓べし、舊く謹、慎、祇、欽、肅などの字を訓來れり、言の本は、万葉集に恙字を、多く都々美と訓み、都々美那久といひ、都々麻波受など、活用けるを思ふに、都々斯美てふ言は、都々美なくと大切にするより出たる言と通ゆ、都々斯美、都々しむ、また此字を、韋夜麻比とも訓來れり、韋夜は禮にて麻比は辭なり、さて敬字の下に屬べき名どもを、多く列たる中に、欽、祇、肅、慎、謹は、共に都々斯美と訓て、字義いさ、か異なり、忌、戒、畏、齋、勤、儉などは、都々志美と

名稱